The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	副詞「まだまだ」の意味と機能
Author(s)	全, 紫蓮
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 2011, 45, p. 83-101
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/25128
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

副詞「まだまだ」の意味と機能

全　　紫　蓮

キーワード：副詞「まだ」，類義形式，量・程度，コンテクスト

１．はじめに

本稿は、副詞「まだ」と「まだまだ」の比較対照を行い、両者の共通点と相違点を明らかにすることを目的とする。

「まだ」と「まだまだ」は、相互に言い換えられる場合と言い換えられない場合がある。次の（1）～（3）に見られる「まだまだ」は「まだ」に言い換えることができる。(1)は時間的意味を表す場合で、事態が変化する前の状態であることを表す「まだまだ」である。(2)(3)は時間的意味を表さない場合で、(2)は事態に増減の余地があることを表す「まだまだ」、(3)は比較構文に用いられ比較の程度を表す「まだまだ」である。

(1)　厳しい残暑が**まだまだ**続きそうだ。
(1')　厳しい残暑が**まだ**続きそうだ。
(2)　この論文には問題点が**まだまだ**たくさんある。
(2')　この論文には問題点が**まだ**たくさんある。
(3)　アメリカなどは取引相手としては、**まだまだ**やりよい方だ。
(3')　アメリカなどは取引相手としては、**まだ**やりよい方だ。

しかし、常に「まだ」と「まだまだ」の言い換えが可能なわけではない。次の（4)～(7)の「まだ」は「まだまだ」に言い換えると不自然になる。

(4)　「論文は仕上がりましたか？」「**まだ**ですが、明日にはできます」

(4') 「論文は仕上がりましたか？」「？**まだまだ**ですが、明日にはできます」

(5) 時間は**まだ**少し残っている。

(5') ？時間は**まだまだ**少し残っている。

(6) 「お昼ご飯もう食べた？」「**まだ**食べていません」

(6') 「お昼ご飯もう食べた？」「？**まだまだ**食べていません」

(7) 「**まだ**来ないの？おかしいわねえ」

(7') 「？**まだまだ**来ないの？おかしいわねえ」

一方、「まだまだ」しか使用できない場合もある。(8)の「まだまだ」は「まだ」に言い換えると不自然になる。そして、(9)は「まだまだ」のみに限定される。

(8) 私なんか**まだまだ**未熟者です。

(8') ？私なんか**まだ**未熟者です。

(9) 私なんか**まだまだ**です。

(9') ＊私なんか**まだ**です。

以上のように、副詞「まだ」と「まだまだ」は、相互に言い換えられる場合（(1)～(3)）もあれば、「まだ」の方が適切な場合（(4)～(7)）、「まだまだ」の方が適切な場合（(8)(9)）がある。以下では、このような「まだ」と「まだまだ」の比較対照を行いつつ、その意味・機能について分析する。

２．先行研究

副詞「まだまだ」は、副詞「まだ」の単なる強調形式として扱われることが多い。「まだまだ」は、辞典類において「まだ」を強めた語として記述されている。飛田・浅田（1994）『現代副詞用法辞典』においても、「ま

だまだ」は「まだ」を強調した意味を表すと記述されているのみで、「まだ」との違いについては、「まだまだ」には比較の程度を表す「まだ」を強調した意味はないと指摘されているに留まっている。また、飛田・浅田(1994)があげている次の例は、すべて「まだ」に言い換えられるものであり、「まだ」しか使用できない場合、「まだまだ」しか使用できない場合の指摘はなされていない。

「まだ」の意味用法

(1)　ある状態が基準点に至っていない様子を表す。

(2)　(1)から進んで、ある状態が基準点に至ってもなお継続している様子を表す。

(3)　(1)から進んで、ある状態が基準点に至るには余地が十分ある様子を表す。

(4)　(3)から進んで、さらに付け加える様子を表す。

(5)　最悪の状態よりは少しだけ状態が好ましくなる様子を表す。

「まだまだ」の意味用法

「まだ」の(1)を強調した意味：「試合の行方は**まだまだ**わかりません」

「まだ」の(2)を強調した意味：(クイズ番組で)「クイズは**まだまだ**続きます」

「まだ」の(3)を強調した意味：「締切には**まだまだ**十分に間に合う」

「まだ」の(4)を強調した意味：「日本には秘境が**まだまだ**たくさん残っている」

(以上、飛田・浅田 1994：497-499、502 より。整理は筆者。)

以上のように、先行研究において、「まだまだ」は「まだ」を強調した意味とされているのみで、「まだ」の意味をどのように強調しているのかについては明確にされていない。

３.「まだ」と「まだまだ」の共通点と相違点

本節では、「まだ」と「まだまだ」の共通点と相違点について述べる。上述したように、「まだ」と「まだまだ」の言い換え関係は、次のように考えられる。

・「まだ」「まだまだ」のいずれも使用できる場合（3.1）
・「まだ」しか使えない場合（3.2）
・「まだまだ」しか使えない場合（3.3）

以下、それぞれの場合について述べていく[1)]。

3.1.「まだ」「まだまだ」のいずれも使用できる場合

次のような場合は、「まだ」「まだまだ」のいずれも使用可能である。

① 事態の不変継続を表す場合
② 事態に増減の余地があることを表す場合
③ 比較の程度を表す場合

(10) は、①事態の不変継続を表す場合、(11)は、②事態に増減の余地があることを表す場合、(12)は、③比較の程度を表す場合である。これらの「まだ」は、すべて「まだまだ」に言い換えることができる。

(10) サイダ中心部でクリーニング店を営むサミール・バラジーさん（３２）は停電で真っ暗な店内で「停戦にはなったがイスラエルがいつまたミサイルを撃ち込んでくるか分かったものじゃない。**まだ**戦いは続いているよ」と硬い表情を崩さなかった。（毎日新聞・2006 年 8 月 15 日朝刊 2 面）

(11) 愛媛県で生体腎移植をめぐり臓器売買があった疑いで患者と内縁の妻が逮捕された。9年前の臓器移植法施行以来、初の摘発という。親族を装ってドナーとなった女性に金品が渡されたのだが、ドナーが親族を装う例は他にも**まだ**あるといわれる。(毎日新聞・2006年10月3日朝刊1面)

(12) ツバナの根、ハコベ、アカザ、ソデナ、タンガラセ(学名でない名前かもしれません)などは湯掻いて、おひたし、または煎りつけにして副食にしておりました。人蔘や牛蒡の茎は**まだ**上等の野菜の方でございました。栄養失調または寝小便する子供は、イチジクの虫、クサギの虫を醤油で附焼にして食べさせられておりました。(黒い雨)

ただし、次のように、上記の①～③が＜量・程度が大＞である場合は、「まだ」に言い換えてもよいが、「まだまだ」の方が使用されやすい。

①' ＜不変継続の時間量が大＞
②' ＜増減の数量が大＞
③' ＜比較の程度が大＞

①' ＜不変継続の時間量が大＞

「まだまだ」は、事態の変化までの時間量が大であることを通して、「まだ」の意味を強調する。このような「まだまだ」は、次のａ～ｄのようなコンテクストでよく用いられる。

a. はなはだしい状態の不変継続

次の(13)(14)では、波線部からその古さ、暑さが話し手の常識や予想を上回るはなはだしい状態であることが分かる。ここで「まだまだ」は、状

態のはなはだしさから変化がなかなか起こりにくく、変化までの時間量が大であることで状態の不変継続を強調する。(13)は、状態のはなはだしさが同一文に現れているが、(14)のように、前文に提示されることもある。

(13) 当時のオックスフォードは二〇世紀の話とは思えぬほど**まだまだ**古い大学の雰囲気を残していた。(毎日新聞・2006年1月15日朝刊読書面)

(14) 大阪市の午前１１時現在の気温は３２・２度で、予想最高気温は３６度。大阪市のメーンストリート・御堂筋では、秋の訪れを告げるイチョウ並木のギンナンが実り始めたが、**まだまだ**厳しい残暑が続きそうだ。(毎日新聞・2006年8月23日夕刊総合面)

b. 変化しにくい状況の不変継続

(15)(16)は、「大丈夫な状態」「安心できない状態」が変化しにくい状況(根拠)が同一文かコンテクストに提示されている。この場合も、「まだまだ」は、状況的に状態が変化しにくく、変化までの時間量が大であるということで、状態の不変継続を強調する。

(15)「あんまり勢よくやられると、髪の毛が心配だ。近ごろ、かなり薄くなってきたようなんだ」「なーに、お父さんの髪はたっぷりあったから、一郎さんも**まだまだ**大丈夫だよ」(砂の上の植物群)

(16) そういうわが国の軍用機の変革を、峻一はつぶさにまざまざと情熱をこめて見、頭に刻みこみ、胸に畳み、そればかりかひそかに写真まで写した。(略) しかし、**まだまだ**安心はできなかった。油断はならなかった。いや、日本陸海軍の航空機は仮想敵

国のアメリカ―（略）―のそれより明瞭に劣勢であるといえる。（楡家の人びと）

c. 実現（変化）までの時間量が大

(17)は、事態の実現までに時間が充分残っていることが文に提示されている。また、(18)のように、時間量・運動量が多いことを表す副詞（「十分」）を伴っている場合もよく見られる。

(17) 第２回全国大会は来年秋と**まだまだ**先だが、すでに問い合わせがくるという。（毎日新聞・2006 年 10 月 25 日夕刊総合面）

(18) 四半世紀も昔、我が家の三つ違いの息子たちも学校の指定ということで高いランドセルを買わされた。６年間使用しても**まだまだ**十分使えそうで、何と大きなムダを親は強いられていることだろう、と思ったことであった。（毎日新聞・2006 年 3 月 18 日朝刊解説面）

d. 時間とともに変化するスケールの早い段階

(19)(20)は、「作業の上達度」「働く年齢」といった時間とともに変化するスケールにおいて、文の表す状態が早い段階であることがコンテクストから読み取れる。「まだまだ」は、現在の状態が変化するスケールの初期段階であることで、変化までには時間が多く残っていることを表す。

(19) 私の読唇術は**まだまだ**未熟なのだ。読唇術というものは非常にデリケートな作業であって、二カ月ばかりの市民講座で完全にマスターできるというような代物ではないのだ。（世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド）

(20)「（略）農業従事者の平均年齢は６５歳を超えています。６０歳

は**まだまだ**若いですよ。われわれはそのための水先案内人です」と話す。（毎日新聞・2006 年 9 月 14 日朝刊特集面）

②’＜増減の数量が大＞

事態に増減の余地があることを表す場合において、「まだまだ」は増減の数量が大であることを通して、その意味を強調する。(21)(22)は、多数を表す表現（「いくらも」「数限りなく」）を伴っており、(23)は、前文に「不足している人数が非常に多い」ことが提示されている。なお、「まだ」も同様だが、「まだまだ」が数量表現を伴った場合は、数量表現の直前にくるという構文的特徴がある。

(21)「これで五機やっつけた。だけど、**まだまだ**いくらもくる」「落着きなさい。防空壕にはいってらっしゃい」と、龍子が叱りつけるように言った。（楡家の人びと）

(22) 明治になって、ちょんまげを切り、ざんぎり頭にすることが、新しい時代の人間のシンボルのように思われた。これなど、形をひどく問題にし、みながその新しい形にならうことが改革であるという感触をもっていたのである。　このような例は、日本の歴史上の記録を調べていけば、**まだまだ**数限りなくあるだろう。（たべものと日本人）

(23) しかし、上海では展覧会の総合的な経験がある人材は１００人足らず。需要の３分の１という。万博の運営には６万～７万の人材が必要とされるが、**まだまだ**足りない。会展師の人材育成は急務となっている。（毎日新聞・2006 年 7 月 1 日朝刊国際面）

③’＜比較の程度が大＞

飛田・浅田（1994）の記述とは違って、実際の用例には比較の程度が大

であることを表す「まだまだ」が見られる。(24)(25)で「まだまだ」は、二つ以上を比較し、ある一方が他方よりさらにそうであるという意味を表す。コンテクストから分かるように、「一ばん嫌な相手」と「東京」(「第一の都市」) との比較を通して、その程度が大であることが強調されている。

(24) 私が会社にいた時、輸出部門を担当している友人から、アメリカなどは取引相手としては、**まだまだ**やりよい方だという話をきいたことがある。上には上があるもので、一ばん嫌な相手は○○○国人だ、といった時の友人の表情は今でも思い出すことができる。(稟議と根回し)

(25)「野幌だったか、汽車の窓から煉瓦工場が見えたよ。アマ会社やビール工場なども、札幌にはあるんだものなあ。想像もしなかったよ」「札幌の人間が聞いたら、それは吹き出すよ。だが、そうは言っても、まあ東京からみれば**まだまだ**田舎だからねえ」(塩狩峠)

3.2.「まだ」しか使えない場合

上記の①'～③'とは逆に、＜量・程度が大＞であることを表さない場合は、「まだ」しか使用できない。時間量・数量・程度が小であることを表す①''～③''と、量・程度を問わない④のような場合である。

①'' ＜不変継続の時間量が小＞
②'' ＜増減の数量が小＞
③'' ＜比較の程度が小＞
④ 実現の有無を表す場合

まず、(26)～(28)は、＜量・程度が小＞であることを表す場合である。(26)

は、後続する文から分かるように、実現までの時間量が小である（①”）。(27)は、その数量が少ないことを示す表現（「二人の」）を伴っている（②”）。(28)は、一方がましではあるがいずれも苦しい状況で、その苦しさには大差がない場面である（③”）。なお、共起した述語「ましだ」も「少しよい様子を表す（飛田・浅田 1991：512)」語である。すべて「まだまだ」の使用は不適切である。

(26)「あのね、悌四郎さん見えた？」 太郎は尋ねた。「**まだ**よ。でも間もなくいらっしゃると思うよ」信子は答えた。（太郎物語大学編）

(27) 中の姉の美那さんのほかに、**まだ**二人の姉があったのである。残された姉たちは、そろって不幸な生まれつきであった。二人とも、生まれながらに目が悪かった。（忍ぶ川）

(28) 寝ようとすればするほど、かえって気が立ってくる。眼がひりつきはじめた。涙も、またたきも、たえまなく降りつづける砂には、さからいきれないらしい。手拭をはらって、顔をつつんだ。息苦しかったが、この方が**まだ**ましだ。（砂の女）

次に、(29)～(32)のように、量・程度を問わない事態の未実現を表す文において、「まだまだ」の使用は不適切である。(29)（30）は、実現の有無を述べているだけで、実現までの時間量は問わない[2)]。なお、(31)（32）は、コンテクストからみて「もう死んでいるはず」「もう来るべき」といった予測があり、予測に反した事実に対する話し手の驚きや否定的感情が前面化された文である。予測した事態の未実現を表しており、実現までの時間量を明示するのではないので、「まだまだ」の使用は不適切である[3)]。

(29)「（略）わたしも朝おきてから**まだ**なにも食べていないんです」

厚子はエプロンをかけ、流し台に立って行った。(冬の旅)

(30)「どうです、夕食は**まだ**でしょう？」と柳が言った。「ええ」「じゃ、この上へ行きましょう。フランス料理の旨い店がありますからね」(女社長に乾杯！)

(31) 年少の子供たちは学校から戻ると、玄関口でそっと声をひそめてこう訊いた。「**まだ**、婆やは、死ななかった？」それはなぜとなく残忍なふうに聞えた。大人たちはせめて一刻も早く死が訪れて、下田の婆やを苦痛から解放してくれ、自分たちもこの面倒事から解放されることを願っていたものだから。(楡家の人びと)

(32)「ねえ、みどり**まだ**来ないの？」 と、ホステスの一人が苛々した声を出す。「忙しいのに、いやねえ！」(女社長に乾杯！)

3.3.「まだまだ」しか使えない場合

「まだまだ」は一定の条件のもとでは、次のような意味を表すようになる。この場合は、「まだまだ」のみに限定される。

A. 単独で述語になって、話し手の否定的評価を表す場合
B. 程度が極端に大である場合

A. 単独で述語になって、話し手の否定的評価を表す場合

「まだまだ」が「駄目だ」「無理だ」「未熟だ」などのような「不可能」「負の評価」[4] を表す述語と共起すると、話し手の否定的評価を表すモーダル的意味で用いられる。(33)は、「まだ」に言い換えると不自然になり、「まだまだ」の方が適切である。(34)(35)は、単独で述語になって話し手の否定的評価を表している。この場合は、「まだ」に言い換えられない。

(33) とし子さんのような一途な信仰が持てたらと、わたしいつも思うわ。　――あら、わたくしなんか**まだまだ**駄目。そんなことおっしゃるものじゃない。(草の花)

(33') ？？――あら、わたくしなんか**まだ**駄目。

(34) (略) それより１歳若い内村は「連覇なんて**まだまだ**」と謙そんするが、警視庁剣道指導室の梯正治・主席師範は「けいこへの姿勢も含め若手の模範。次代を担う存在になれるはず」と期待する。(毎日新聞・2006年11月4日朝刊スポーツ面)

(34') ＊(略) 内村は「連覇なんて**まだ**」と謙そんするが、(略)

(35) ここ１０年ぐらいかな、映画やテレビでいい話をいただくようになったのは。(略) 芝居の神様が「お前は**まだまだ**。これもやれ、あれもやれ、もっと勉強しろ」って言ってたんだろうと。(毎日新聞・2006年1月18日夕刊総合面)

(35')「＊お前は**まだ**。これもやれ、あれもやれ、もっと勉強しろ」

なお、話し手の否定的評価を表す場合には、(36)のように「まだ」「まだまだ」のいずれも「なんか」「なんて」を伴わないと、時間的意味になる場合もある。しかし、(37)のように「なんか」「なんて」を伴うと、話し手の否定的評価の意味が明示される。この場合は、「まだ」よりも「まだまだ」の方が使用されやすい（適切になる)。そして、(38)のように「まだまだ」の単独使用になると、「なんか」「なんて」を伴わなくても話し手の否定的評価の意味になる。この場合は、「まだ」は使用できない。(39)のように「まだ」を使用すると時間的意味になる。

(36) 私は｛**まだまだ**／**まだ**｝駄目です。

(37) 私なんか｛**まだまだ**／？**まだ**｝駄目です。

(38)　{私は／私なんか}　**まだまだ**です。

(39)　{私は／＊私なんか}　**まだ**です。

B.　程度が極端に大である場合

(40)では、「まだまだ」が「きりがない」といった数量的に限界がないことを表す述語を修飾している。＜量・程度が大＞であることを明示する文では、「まだ」の使用も可能であったが、＜量・程度が大＞が＜量・態度が極端に大＞へと一層強調されると、「まだまだ」の使用は不可能になると思われる[5)]。

(40)　諸外国には女性でも国の主宰者となった人が沢山います。(略)経済学者としてはマルチノー、ホーゼット、哲学者としてはマダーム・ド・ステル、詩人のブローニング、小説家のショアンナ、ベイリンと数えあげたら**まだまだ**きりがありません。(花埋み)

(40')　＊(略)小説家のショアンナ、ベイリンと数えあげたら**まだ**きりがありません。

４．おわりに

本稿では、副詞「まだ」と「まだ」の強調形式とされることが多かった「まだまだ」の比較対照を行い、両方とも使用可能な場合と、一方しか使用できない場合があることを明らかにした。さらに、両方とも使用可能な場合においては、「まだまだ」がどのようにして「まだ」の意味を強調しているのかを述べ、一方しか使用できない場合においては、両者にどのような意味・機能的な違いがあるのかを述べた。以上をまとめると、次のようになる。

[1]　本稿では、「まだ」と「まだまだ」の意味を、①事態の不変継続を表す場合、②事態に増減の余地があることを表す場合、③比較の程度を表す場合に分けた。今回の考察からは、飛田・浅田（1994）の記述とは違って、「まだまだ」にも比較の程度を表す意味用法があることが明らかになった。

[2]　①～③が＜量・程度が大＞であることを明示する場合（①’時間量が大、②’数量が大、③’程度が大）は、「まだまだ」の方が使用されやすい。このように、「まだまだ」は、＜量・程度が大＞であることを通して、「まだ」の意味を強調していると考えられる。

[3]　従って、＜量・程度が大＞であることを表さない場合、すなわち＜量・程度が小＞（①”時間量が小、②”数量が小、③”程度が小）である場合や、量・程度を問わない場合（④実現の有無を表す場合）は、「まだ」のみに限定される。特に、①”④には、「まだ」が述語として単独で使用されることがある。

[4]　一方、「まだまだ」が話し手の否定的評価を表すモーダル的意味で用いられた場合、量・程度が極端に大であることが明示された場合は、「まだまだ」のみに限定される。モーダル的意味機能の場合は、「まだまだ」が述語で単独使用される。

以上のように、本稿では、「まだ」の類義形式として「まだまだ」を取り上げ、両形式の意味・機能的な共通性と違いを考察した。「まだ」の類義形式には「まだまだ」のほかに「まだしも」「いまだに」が考えられる。

次の例の「まだ」は「まだしも」に言い換えられる。比較の程度を表す場合、「まだまだ」は＜程度が大＞の場合に使用されやすかったが、「まだしも」は逆に＜程度が小＞である場合に使用されやすい。なお、「まだしも」は、「～ならまだしも、～」というパターンでよく用いられる。

・「下に行きな。下の方が**まだ**少しは暖かいぜ。ただ少々臭いはするがな」（世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド）
　→「（略）下の方が**まだしも**少しは暖かいぜ。（略）」
・テレビや雑誌では、実にさまざまな「ランキング」をしたがる。しかし、スポーツや勝負ごとなら**まだしも**、都道府県ランキングなど、本来なら順位をつけたり、価値を数字に置き換えるのが難しいものにまで、無理やり順位をつけているように思える。（毎日新聞・2006年12月18日朝刊社説面）

「いまだに」は、文章語で使用されやすいという文体的な違いもあるが[6]、文法的には、多義的な「まだ」と異なって、時間的意味だけを表す。そして、「いまだに」は現在の場合でしか使用できない。文体差を問わないとすれば、現在のことを表す最初の例は「いまだに」に言い換えられるが、未来・過去のことを表す最後の２例は「いまだに」に言い換えられない。

・「**まだ**その時計使ってるのか？」中をのぞきこみながら木村が言った。「うん。使いだすとこれが一番ね」（新橋烏森口青春篇）
　→「**いまだに**その時計使ってるのか？」
・千尋「エ――、**まだ**行くのお父さん、もう帰ろうよ」（千と千尋の神隠し）
　→「＊エ――、**いまだに**行くのお父さん、もう帰ろうよ」
・「そういえば、戦争が終って長い間経って、久しぶりに一郎さんと会ったときは、**まだ**自分の店を持っていなかったっけ」（砂の上の植物群）
　→「＊（略）久しぶりに一郎さんと会ったときは、**いまだに**自分の店を持っていなかったっけ」

ただし、「いまだに」も、コンテクスト的に使用されやすい場合がある。次の例には、事態が以前に起こるはずだった（「もう足を洗っているはず」）という前提があり、その前提を前文に提示している。そのため、「それにもかかわらず」のような逆接の接続詞で連結されている。この場合、「まだ」の使用も可能であるが、文章語では「いまだに」の方が適切であろう。

・「まあ、いいや、高校になったら、必ず足を洗って、勉強に専念しますから」と母の肩をたたいていた。それにもかかわらず、**未だに**太郎は足を洗わないのである。（太郎物語高校編）

従って、次のように、事態の実現（変化）に関わる特別な前提がない場合は「まだ」に限定される。

・振り向くとかよが立っていた。髪の毛が**まだ**雨に濡れている。「どうなのですか」「夕方までは保ちそうだがのう」　かよは暗い表情を窓へ向けた。（花埋み）
　→＊髪の毛が**いまだに**雨に濡れている。

このように、「まだまだ」とは異なって、「いまだに」は「まだ」が時間的意味のみを表す場合の類義形式である。また、「まだしも」は、「まだ」が時間的意味を表さない、比較の程度を表す場合の類義形式である。今後は、類義形式「まだ」「まだまだ」「まだしも」「いまだに」の共通点と相違点について総合的に考察を進めていきたい。

注

1)　本稿では、便宜的に、現代日本語を1950年代以降のものとし、1950年代以降の小説、シナリオ、論述文、新聞から「まだ」「まだまだ」を収集した。調査資料は次の通りである。

・『CD-ROM版　新潮文庫の100冊』所収1950年以降の小説（47作品）、1990年以降の文庫本（8作品）

・『シナリオ作家協会編　01'年鑑代表シナリオ集』所収シナリオ（10篇）

・『CASTEL/J　CD-ROM（日本語教育支援システム研究会）』所収講談社・現代新書の論述文（24篇）

・『CD-毎日新聞』所収2006年度の記事

用例を提示する際、「まだ」「まだまだ」が用いられた文は実線で、「まだ」「まだまだ」の意味と関連する文の部分やコンテクストは波線で示している。また、「＊」は非文法的であることを、「？」は非文法的ではないが場面的に不適切であることを示す。なお、用例の出典は文末の括弧内に示している。出典を示していない例はすべて作例である。

2)「まだ～シテイナイ」はパーフェクト相現在の否定として事態の未実現を表し、「まだまだ～シテイナイ」は継続相現在の否定として事態の不変継続を表すと思われる。

・ヤンキースの松井秀喜外野手は、（略）「**まだまだ**疲れていない。これから１６２試合あるんだから」と頼もしい。（毎日新聞・2006年3月31日夕刊スポーツ面）

・また、女性の側でも、夜の宴会などの慣行になじめない面がありました。**まだまだ**意識が変化していないところがあるということでしょう。（毎日新聞・2006年3月14日朝刊特集面）

3)　この場合の「まだ」は相手の答えを求めない二次的な疑問文で用いられることが多い。また、(31)では述語にシナカッタ形式（「死ななかった」）が使用されているのも特徴的である。これについて、工藤（1996：112）は、「まだ～シナカッタ」は「過去の特定時における非アクチュアル化」を表し、「（その時点において）実現するはずの＜完成相＞出来事の非アクチュアル化に対する＜期待はずれ＞を明示している」と指摘している。

なお、(31)(32)は、事態の未実現を表す文であるが、次のように事態の継続を表す場合もある。しかし、この例も「どうした」「なんだ」のような表現を伴って「もう終わっているはず」といった予測と反した事実を表しており、時間量を問うわけではない。

・そのとき、会議室のドアが威勢よく開いた。「何だ、**まだ**やっとるんですか」

入って来たのはＫＭチェーンの真鍋だった。（女社長に乾杯！）

4）工藤（2000）の用語である。工藤（2000）では、陳述副詞と共起する語彙的否定形式のタイプを、「不可能」「困難」「欠如・消滅」「不一致」「負の評価」「気にしない」に分けている。

5）（40）のほか、同じパターンとしては、「まだまだ～数え切れない／限りない／際限がない／計り知れない」のようなものが考えられる。

6）「まだ」と「いまだに」の文体的な違いについては、工藤（1985）にも指摘されている。用例調査の結果、「まだ」は計 6723 例のうち、＜小説：1645 例（会話文：633、地の文：1012）＞、＜シナリオ：24 例＞、＜論述文：565 例＞、＜新聞：4489 例＞の分布を見せた。一方、「いまだに」は計 368 例のうち、＜小説：74 例（会話文：13、地の文：61）＞、＜シナリオ：0 例＞、＜論述文:24 例＞、＜新聞:270 例＞の分布を見せた。「いまだに」は「まだ」に比べて使用頻度が低く、小説の地の文、論述文、新聞のようなテクストタイプでよく用いられる。「いまだに」の用例調査資料も、注 1）の通りである。

用例出典

注 1）を参照されたい。紙幅の都合上、詳細は省略する。

参考文献

奥田靖雄（1996）「文のこと―その分類をめぐって―」『教育国語』2-22　むぎ書房

工藤　浩（1985）「日本語の文の時間表現」『言語生活』403 号

工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテクスト―現代日本語の時間の表現―』ひつじ書房

＿＿＿＿＿（1996）「否定のアスペクト・テンス体系とディスコース」『ことばの科学 7』むぎ書房

＿＿＿＿＿（2000）「否定の表現」『日本語の文法 2　時・否定と取り立て』岩波書店

鈴木重幸（1972）『日本語文法・形態論』むぎ書房

飛田良文・浅田秀子（1991）『現代形容詞用法辞典』東京堂出版

＿＿＿＿＿＿＿＿＿（1994）『現代副詞用法辞典』東京堂出版

森田良行（1989）『基礎日本語辞典』角川書店

渡辺　実（2001）『さすが！日本語』ちくま新書

（大学院博士後期課程学生）

SUMMARY

On the Meaning and Function of '*madamada*'

JaYeon Jun

An adverb, '*mada*' has three meanings as below. '*madamada*' which has been considered as a form that emphasizes '*mada*' also has these meanings.

(a) Temporal:
to indicate a constant and continuous aspect of an event

(b) Quantative:
to indicates that something still has an extra for an increase or a decrease

(c) Comparative:
to indicate the degree of one is better than the other

Both '*mada*' and '*madamada*' can be used in (a)~(c), however, '*madamada*' is preferred when the amount, the quantity or the degree is large. '*madamada*' is used as a form that emphasizes '*mada*', especially when the quantity or the degree is large. When those are small or unspecific, only '*mada*' can be used.

On the other hand, '*madamada*' has a modal usage that shows speaker's negative feelings toward the event or status. When '*madamada*' is in the usage, it is used as a predicate. '*mada*' does not have this usage, therefore, the '*madamada*' can not be replaced with '*mada*'.